

みやもとだより

第8号 平成27年4月発行

季節のおまつり

長浜曳山まつり (長浜子供歌舞伎)



湖国長浜といわれるこの町は、かつて琵琶湖の船の交通拠点で、湖北一帯の年貢米等の集散地として、加えて浜縮緬や浜蚊帳の生産・流通の町として繁栄した。また、北国街道の宿場町、湖北真宗の大通寺や長浜八幡宮の門前町として賑わった。

十六世紀末、戦国下剋上の時代、羽柴秀吉が初めて城を構えたのが長浜で、待望の男子。これらの曳山には、長浜の名工・藤岡和泉や、国友鉄砲の鍛冶職人たちによる飾り金具、木彫、絹などの高度の技術、それに町衆の美意識と財力、努力が結集し、豪華絢爛たる姿となつて今に伝わっている。

「鳳凰山」と「翁山」の曳山の見送り幕には十六世紀ベルギー製の飾毛綴(タペストリー)もある。

現在は毎年四基が交替で曳行され、四月中旬には曳山の舞台で五歳から十二歳くらいまでの男子による歌舞伎が演じられる。特に十五日には八幡宮境内で午前十時前から四つの山組が歌舞伎を奉納し、そのあと参道の数か所及び御旅所を巡って上演される。出し物は絵本太功記、忠臣蔵など多数あり、大人顔負けの熱演は曳山祭りの一番の見所である。

(写真・文 宮本卯之助)



この国の佳き伝統とともに
宮本卯之助

浅草神社宮神輿本堂

「堂上げ・堂下げ」

三月十七日・十八日



もつて神社へ還御する一連のこの本尊示現会は、浅草寺と浅草神社の年中行事となっています。

太鼓むかしばなし

天野式リズム太鼓

歌や音楽に合わせて体を動かし、リズム感や集中力、感受性、協調性などを高める幼児教育・リトミックでは、ピアノやタンバリンの他に太鼓が使われています。海外で生まれたリトミック教育を日本に普及させるため、日本女子体育短期大学の教授であった天野蝶先生が創案したのが始まりです。昭和十（一九三五）年頃、弊社にてリトミック専用の太鼓製作を仰せつかり、それらが天野式の特徴となりました。打面は牛皮で、胴は軽量な曲げわっぱで作られています。胴の裏側には、半月型の持ち手が付いています。

お客様とともに歩んできた弊社の軌跡を感じられる一品です。

日本ミュージカルとも称される能楽ですが、オーケストラのように多くの楽器は用いず、三種の太鼓と一種の笛で多彩な場面を表現します。能楽を観たことのない方でも、ひなまつりに飾られる雛人形の「五人囃子」と言えばピンとくるかもしれません。雛壇上の少年たちは、能楽の演奏に用いる楽器をそれぞれ手に持っています。

なかでも笛は「能管」と言います。旋律を奏でて人物の出入りや心情などを表現しています。一五〇年くらい古い竹で作るのが理想とされ、細かく割いて皮目を裏返しに合わせて筒型にしています。管の内部にノドと呼ばれる竹が入っているのが特徴です。ノドが

になりますが、その分、吹きぬくために遠くに響く強い音が生まれます。ほかにも、内部に漆を何度も塗り重ねるなど、一本の能管には実に様々な技が込められています。

浅草寺御本尊が隅田川で推古天皇の御代三月十八日にご示現されたこの日を浅草が誕生した歴史的な日とし、船渡御は節目の年に行われてきましたが、近年三月十七・十八日には三基の宮神輿を浅草寺本堂に堂上げし、一晩安置して翌日堂下げの儀が執り行われています。浅草寺を回る庭祭礼を

古典芸能へのとびら
能管



草になると祭の始まり。浅草では三社祭が目前に迫り、町にもそわそわした空気が流れます。弊社にも新しい仲間が加わり、伝統を受け継ぐ若者の職人が始まります。毎年同じに見える季節の繰り返しでも、社会環境は変わりいくもの。一方で景気は緩やかに回復と言わざるも、少子高齢化が進行する日本。職人の世界でも廃業が多くなってきました。しかし困難を嘆くよりも、変化に前向きに対応していくことが祭と伝統芸能の発展に資する事。祭が時代と共に変化してきたように、どんな未来を切り拓けるか。思いも新たに祭の季節を迎えます。

代表取締役社長
宮本芳彦

発行
株式会社宮本卯之助商店
企画広報室
〒111-10035 東京都台東区西浅草二十一 電話(03)3384-412241
www.miyanoto-unosuke.co.jp